

# 朝比奈をめぐる伝承と『朝日奈物語』

——朝比奈〈地獄破り譚〉の形成過程を探る——

杉 山 和 也

はじめに

本稿で主に取り上げる作品、チェスター・ビーティー・ライブラリー（以下、CBL）所蔵『朝日奈物語』<sup>(1)</sup>は、朝比奈三郎義秀を主人公とする物語である。朝比奈は、次の資料にも見るように中世以降、日本を代表する剛力の武人の一人として捉えられている。

〔1〕『太平記』巻第十五、「三井寺合戦<sup>井</sup>當寺撞鐘事<sup>付</sup>倭藤太事」  
（旧大系）

異國ニハ烏獲・樊噲、吾朝ニハ和泉小次郎・淺井那三郎、  
是皆世ニ雙ビナキ大力ト聞ユレドモ、我等ガ力ニ幾程カマ  
サルベキ。

〔2〕井原西鶴『武道伝来記』序（新編全集）

和朝兵揃への中に、為朝の鉄の弓、武藏坊が長刀、朝比奈  
がちからこぶ、景清が眼玉、これらは見ぬ世の事、中古武  
道の忠義、諸国に高名の敵討、その働き聞き伝へて、筆の  
林・詞の山、心の海静かに、御松久方の雲に、慶びの舞鶴  
これを集めぬ。

古くは『吾妻鏡』にその名が見え、この段階で既に伝説的な存  
在として語られているが、後世、その伝承はさらに多様な形で  
展開していった。代表的なものとしては、和田合戦の際の〈門  
破り譚〉、曾我五郎時致との〈草摺引き〉<sup>(2)</sup>、その他、〈鮫捕獲譚〉<sup>(3)</sup>、  
〈地獄破り譚〉、〈高麗渡航譚〉、〈島巡り譚〉などが挙げられる。

CBL所蔵『朝日奈物語』では、朝比奈が力比べの出来る相  
手を求めて「十字堂」に参り折った後、酒屋で大酒を呑んで眠っ  
た。すると、枕元に小鬼が現れた。嘲笑するので追い掛けると

地獄に辿り着く。地獄の門を剛力で破壊して、討ち入った。閻魔王は降伏し、朝比奈のために宴をする。鬼が朝比奈を呪う内容の舞を舞ったところ朝比奈はこれを咎めて、自分が舞おうとするが大いに酔っていたので倒れた。その拍子に酒屋の女主人に起こされ、これが夢であったことを覚る。朝比奈は地獄に落ちたら、どんなに勇力でも鬼達の餌食になるだろうと覚って、仏道に専念し、仏果を得たという、所謂、〈地獄破り譚〉を中心とした内容である。類似した内容を持つ作品として狂言『朝比奈』や、東京大学国文学研究室蔵奈良絵本『朝日奈』<sup>5</sup>があるが、本作品はそのいずれとも系統を異にしており、貴重であると言える。

それぞれの作品につき、研究の蓄積はあるが、従来の研究ではこれらの作品の内容を対照しつつ分析することが充分に為されて来なかった。また、これらの作品が元になっている朝比奈の和田合戦に於いて頼朝の御所の正門を突破する〈門破り譚〉と、朝比奈が閻魔王を脅かす〈地獄破り譚〉の形成過程に関する検討も充分であるとは言い難い状況にある。

そこで本稿では、朝比奈をめぐる伝承の内、特に〈門破り譚〉と〈地獄破り譚〉を取り上げて、これらの形成過程と中世から近世初期にかけての展開について整理を試みる。その上で、狂言『朝比奈』、奈良絵本『朝日奈』、CBL所蔵『朝日奈物語』の三者について内容を分析し、それぞれの位置について検討してみたい。

## 一、朝比奈〈門破り譚〉の形成

まずは、先にも言及した『吾妻鏡』の記述を確認しておきたい。次に掲げるのは、朝比奈が和田合戦に於いて頼朝の御所の正門を突破したことに言及のある記事である。

〈3〉『吾妻鏡』建暦三年（一二二三）五月二日条（新訂増補・國史大系）

西剋。賊徒遂圍幕府四面。摩旗飛箭。相摸修理亮泰時。同次郎朝時。上総三郎義氏等防戦盡兵略。而朝夷名三郎義秀敗惣門。乱入南庭。攻撃所籠之御家人等。剩縦火於御所。郭内室屋。不殘一字焼亡。依之。將軍家人。御于右大將軍家法花堂。可通火災御之故也。相州。大官令被候御共。此間及挑戰。鳴鑼相和。利劔曜刃。就中義秀振猛威。彰壯力。既以如神。敵于彼之軍士等無免死。

ここから、『吾妻鏡』の段階では、門を突破した場面に関する記述が、極めて簡潔であることが確認される。門の形状や、朝比奈が門を破壊する様子について、特に詳しい描写は認められず、特にこの場面に焦点を当てた形で記されてはいない。

ところが、次の資料からも看取されるように、後世、和田合戦に於ける朝比奈の活躍が語られる中で、朝比奈が門を破る場面が説話として注目されて、絵画などの題材ともなり、広く知られていったと考えられる。この展開については、既に岩城賢

太郎が詳細に分析を行っている。<sup>(6)</sup>

〔4〕『看聞日記』応永三十年（一四二三）七月十五日条（続群書類従・補遺二）

十五日。晴。蓮供御祝着如例。宰相以下。行豊朝臣等候。（中略）夜光臺寺茶接待密々見物。若宮。宰相以下相伴。<sup>座敷</sup>風流燈爐等驚目有其興。雜人群集之間急歸。其後山村拍念佛石井二來。次御所二參。風流鉢高野聖懸負有十餘人。又紅葉枝懸提燈爐。（林間暖酒詩心云々。）種々異形風情有其興。次風流又山村へ行。（殿原田向侍共作之。）石引之鉢也。馬乗一人先行。次石（石上二人形持幣。）付繩大勢引之。風情其興不少。次舟津淺井名門破風情也。門ヲ作淺井名乗馬。（着鎧付七具足。）武者二騎相從。又勸進僧十人許各持杓。鐘ヲ燈爐二張。種々風流其興千萬也。

ただし、本稿で特に注目したいのは、こうした説話に於ける門破りの舞台が、地獄ではなく、飽くまでも現実世界での和田合戦での出来事とされていると考えられる点である。

〔5〕『看聞日記』永享十年（一四三八）六月十日条（続群書類従・補遺二）

十日。雨降。内裏より又目連尊者繪三局。（奥書云 筆者長官前大藏權少輔從五位下藤原光益。嘉慶二年六月日。）給之。殊勝繪也。（絹二書。詞筆者不載。殊勝筆跡也。）又和田左衛門尉平義盛繪七局（淺井三郎義秀幕府住所門破事。）同給。是等自室町殿被進云々。殊勝繪也。握翫無極。

〔5〕の傍線部の「淺井三郎義秀幕府住所門破事」という記述からしても、現実世界での和田合戦で朝比奈が門を破った場面を描いた絵が、ここでは話題になっていると考えられる。そして、このように現実世界での和田合戦での出来事として（門破り譚）が取り上げられる点は、狂言『朝比奈』や奈良絵本『朝日奈』についても同様である。

狂言『朝比奈』については、寛正五年（一四六四）の糺河原の勸進能の三日間の能番組と狂言の曲目とを載せた『異本糺河原勸進申樂記』に、既に「あさひな」と見える。古い時期の台本としては、大蔵虎明本と和泉流『狂言六義』が伝存している。そのあらずじは、いずれも同様である。仏教が広まったことにより、人間どもが極楽にばかり行くため、地獄が飢饉に陥った。そこで地獄の主である閻魔王は自ら六道の辻に赴くことにした。地獄へ責め落とそうと待ち構えていると、ちやうど良さそうな亡者が通りかかる。閻魔王はさっそく地獄に落とそうと責め立てるが、相手が剛力で歯が立たない。閻魔王はそれが朝比奈であったと知って、和田合戦の物語をさせる。朝比奈は武勇談をしながら閻魔王を翻弄し、ついに閻魔王を道案内として極楽浄土に行く、というものである。ここで語られる（門破り譚）は、次の資料の二重傍線部からも確認できるように、朝比奈が和田合戦を物語る場面で登場している。

〔6〕大蔵虎明本「鬼類小名類あさいな」（寛永十九年（一六四二）本奥書／大塚光信編『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』上巻、清文

堂出版、二〇〇六年)

そもくわだいくさのおこりを尋るに(中略)すハあさいなこそ門をやぶれ、もんやぶられてかなハじと、八ほんのかうりやうをかけ、大きく大かすがい、うちぬきくたりしハ、たゞさながらつるぎの山のことなり、あさいな心に思ふやう、なにほどの事のあるべきぞと、こんがうりきじゆのちからをいたし、もんのとびらに手をかけ、さらりくとなつれハ、かねハゆとなつてながれぬる、またものとびらに手をかけ、ゑいやとおせハゑいやとか、へ、くゝ、ゑいやくとおしたりしハ、たゞさながら大ぢしんのゆることくゆらめひて有しよな、されどもあさいなが力やまさりけん、八本のかうりやうもおれ、くわんぬきとくびおしおとし、内なるむしやハ三十騎ばかりおしにうてたりしハ、そのまゝすしをしたることくなり、

(7) 天理図書館蔵・和泉流『狂言六義』九十四「あさいな」(正保頃(一六四四〜一六四七)成立/北川忠彦、他・編『天理本・狂言六義』上巻、三弥井書店、一九九四年)

抑、和田いくさのおこりを尋るに(中略)『すわ、あさいなこそ門をやぶれ』とて、ごろくばんじやく、大きく・かすがいを、打ぬきくゝ、うつたるありさまは、たゞ釵の山のごとくなり、かくてあさいな、手のひらをもつて、くぎのかしらを、さらりくとなづれば、くぎは則湯と成てながれぬ、扱、門の柱に手を懸て、『ゑいやくゝ』とおしけ

れ共、なにかわもつてころふべき、内にも大ぢからが百人斗か、へいた、若、此門やぶらぬ物ならば、いちこのふかくと思ひ、こんがうりきじの力を出し、『ゑいやつ』とおしければ、柱は根よりもおれ、戸びらは内にたおれふす、おしにうたれて死する者は、たゞすしをしたるがごとくなり、

また、奈良絵本『朝日奈』は、徳竹由明に拠れば、近世前期以降の成立と見られ、朝比奈をめぐる伝承を集大成したかのような作品となっている。この作品でも、飽くまでも和田合戦での出来事として、次のように〈門破り譚〉が語られている。

(8) 徳竹由明「東京大学国文学研究室蔵奈良絵本『朝日奈』解題・翻刻」『三田國文』三十四号、二〇〇一年九月

あさいなは一ちんにかけまわりてたゝかひけるか、そのけしきおもひやるへし。ひとへにおにかみのふるまひともいうへし。あまたのくんせいうたれけり。され共こしよのそうもんおはとちふさき、うちよりあまたのつわ物かためければ、うち入へきやうもなし。あさいないかりをなし、とひらのいたに手をかけ、ゑいくゝとおしければ、門はやふれてたをれにけり。これにうちひしかれてしぬるもの、かすしらす、いせきのかいこにあたるがごとし。かのかんのはんくわいからもんをやふりしいきおひ、ことかくやおほえておびた、し

以上、諸資料に見える朝比奈の〈門破り譚〉を辿ってきた。

結果、『吾妻鏡』の段階では、和田合戦で朝比奈が門を突破した場面について、詳しい描写は認められなかった。ところが、十五世紀頃からは特に朝比奈が門を突破した場面に焦点を当てた形で語りが、広く為されていたものと考えられ、絵画などの視覚媒体でも題材として取り上げられていたと見られる。こうした語りは、伝存する作品の中では、狂言『朝比奈』や奈良絵本『朝日奈』に確認できるが、これらの〈門破り譚〉で舞台とされている空間は、飽くまでも現実世界であったことが確認された。

## 二、樊噲の〈門破り譚〉と、朝比奈の〈門破り譚〉

ところで、「はじめに」で確認した通り、朝比奈は日本での勇猛な武人の代表として認識されてきた。そして、〈1〉では、これと対比する形で、異国での代表的な武人として樊噲の名が挙がっていた。同様のことは、次の資料に於いても指摘することが出来る。

### 〈9〉『明徳記』中（群書類従・第二十輯）

其陰ニ鎧路張り立上ガツテ。四方キツト見廻シ給ヘバ。傳聞ク漢祖樊噲張良モ三浦ノ和泉〔田歟〕浅井名モ是程ニハヨモアラジト覺エテ。見ル人皆目ヲ驚カス。

樊噲については、例えば次のような資料にも、その名が見え、中世日本では、広く知られていたと考えられる。

### 〈10〉『今昔物語集』卷第十・第三「高祖、罰項羽始漢代為帝王

語」（新大系）

亦、彼ノ樊会ハ人也ト云ヘドモ、鬼ノ如シ。一度ニ猪ノ片股ヲ食シ、酒一斗ヲ一口ニ吞ム。

### 〈11〉延慶本『平家物語』第五末、七四〇―七四ウ

新中納言、家長ヲ召アレホトノ小舟ニ如何<sup>ナ</sup>樊会張良<sup>カ</sup>乗<sup>リ</sup>トモ何事<sup>カ</sup>可有

〈10〉は、樊噲が登場する和文で記された文献として、早い時期のものである。「鬼ノ如シ」と評され、「一度ニ猪ノ片股ヲ食シ、酒一斗ヲ一口ニ吞ム」という豪快な人物として紹介されている。<sup>9)</sup> 〈11〉は、源氏側から来た船とはいえ、あの程度の小舟なら、乗れる人数も限られており、どれほど強い武士が乗っているように恐れるには足りない、という文脈で樊噲の名が挙がっている。

そして、ここで注意しておきたいのは、日本では樊噲についても、その武勇譚として、門を破壊する説話が知られている点である。<sup>10)</sup> そして、〈8〉の二重傍線部では、「かのかんのはんくわいかからもんをやふりしいきおひ、ことかくやとおほえておびた、し」として、朝比奈が門を破る様子を、特に樊噲の〈門破り譚〉に重ねて捉えられていた。樊噲の〈門破り譚〉の典拠は、次の資料に求められる。

### 〈12〉『史記』「項羽本紀第七」（新釈漢文大系）

於是、張良至三軍門、見樊噲。樊噲曰、今日之事何如。良曰、甚急。今者項莊拔劍舞。其意常在沛公也。噲曰、

此迫矣。臣請入與之同命。噲即帶劍擁盾入軍門。交戟之衛士、欲止不内。樊噲側其盾、以撞。衛士仆地。噲遂入。

〔13〕『史記』「樊鄴滕灌列傳第三十五」（新釈漢文大系）

時獨沛公與張良得入坐。樊噲在營外、聞事急、乃持鐵盾入到營。營衛止噲、噲直撞入、立帳下。

ただし、いづれにも門を破壊する描写は見えない。特に〔13〕には「帳下」という文言もあることから、簡易な造りからなる軍営であることが想定され、門もまた簡易なものであると考えられる。樊噲の〈門破り譚〉が成立した経緯については、次の資料に見るように、既に近世の段階で見解が示されている。<sup>〔1〕</sup>

〔14〕松浦静山『甲子夜話』卷六十三（東洋文庫版）

世に鴻門会、樊噲の門破りと云伝へて、稗史は論なし。狩野家の輩も皆、盾を脇挟て大門を推毀る体を描く。是を見れば、噲は誠に大力量なる哉。去れども『史記』を見れば、大門を推し毀りしには非ず。画工の文を讀誤りたるにや。

〔15〕山崎美成『海録』卷之十一「樊噲排闥」（国書刊行会版）

今樊噲門やぶりとて、楯を持ちて門をやぶるの圖を畫く事とは、もと蒙求より謬りしものなり、門を破りしは樊噲排闥とて、高祖の病める時に、戸者に詔て群臣を入ざらしむる故に、排闥（師古云、闥宮中小門、）直に入たりし也、鴻門の會に、事急なりと聞て楯を持て入たるまでにて、これは野陣なれば、幕など張れる位の事なるべし、この二條を

蒙求に連ねいへるをもて、世に訛り傳へしなり、かゝる事世にはいと多かるものぞ

この誤解が、果たして日本に於いてのみ生じたものであるのかどうかについては、定かではないが、いづれも、的確な指摘であらう。〔15〕で指摘される『蒙求』の本文は次の通りである。

〔16〕李瀚『蒙求』「樊噲排闥 辛毘引裾」（新釈漢文大系）

前漢樊噲沛人。以屠狗爲事。從高祖定天下、以功封舞陽侯。帝嘗病、惡見人臥禁中、詔戸者無得入群臣。群臣絳灌等莫敢入十餘日。噲乃排闥直入、大臣隨之。上獨枕一宦者臥。噲等流涕曰、始陛下與臣等起豐沛、定天下。何其壯也。今天下已定、又何憊也。且陛下病甚、不見臣等計事、顧獨與一宦者絕乎。且獨不見趙高之事乎。帝笑而起。初帝已定關中。項王至、怒欲攻之。帝從百餘騎見羽鴻門。亞父范增令項莊拔劍舞欲擊帝。項伯常屏蔽之。噲聞事急、持盾直入怒甚。羽壯之、賜以卮酒。噲飲酒拔劍切肉食之曰、臣死且不辭。豈特卮酒乎。帝如廁、壓噲出、獨騎馬。噲等步從山下走、歸霸上軍。是日微噲幾殆。

いづれにせよ、日本では樊噲の剛力を象徵する説話として、〈門破り譚〉は広がりを見せたわけだが、その早い時期の例として、まず『蒙求』を原拠とした次の資料が挙げられる。<sup>〔13〕</sup>

〔17〕『蒙求和歌』第二、夏部十五首「樊会排闥」<sup>〔水島〕</sup>

樊会ハ浦国人也、漢高祖ノ忠臣タリキ、位ニツキテ天下ヲトリテ後、病アテ人ノ多クマキルヲトドメテ、ヒトリノツカヒ人ヲ身ニソヘ給ヒキ、勅下シテ門戸ヲマモラセテ群臣ヲ入レラレズ、樊会、世ノタメ此ヲ歎キテ、オシテ門戸ヲヒラキテ、近クススミマキリテ、涙ヲ流シテイサメ申シテ云ハク、君ノ世ヲトリタマヒシハジメヨリツカヘテ忠アリキ、天下スデニサダマリヌ、君ノ御ヤマヒヲ大臣オヂオソレ申ス、群臣ニミエ給ヒテ、ハカリゴトラメグラシ給フベキ所ニ、一人ヲノミチカヅケテ、群臣ニウトマレタマハムコトノ心ウクカナシキ也、昔趙高ガ故ヲバシリタマハズヤト奏スルニ、オホヤケワラヒテオキイデ、此ニシタガヒタマヒニケリ

また次の資料についても、樊噲がその剛力を以て、門を押し破ったように読み取れる。

〈18〉『源平盛衰記』巻第一「五節夜闇討」（中世の文学・三弥井書店）

樊噲大ニ驚テ、門ヲ入ニ、守門ノ兵禦<sup>レ</sup>之ケレバ、楯ヲ先立テ破入ヌ。

さらに、『太平記』諸本に於いても、樊噲の「門破り譚」は取り上げられており、次のように語られている。

〈19〉西源院本『太平記』巻第二十八「漢楚合戦之事」<sup>付</sup>吉野殿被成論旨事」（『西源院本太平記』刀江書院、一九三六年）

樊噲此已ニ迫レル也、速ニ入テ沛公ト同ク命ヲ失ハンニハ

不<sup>レ</sup>如トテ、胄ノ緒ヲシメ、鐵ノ楯脇挾テ、軍門之内ヘ入ラントス、門ノ左右ニ交戦ノ衛士五百餘人、戈ヲ支ヘ、太刀ヲ拔テ、是ヲ入シトス、樊噲大ニ怒テ、其楯ヲ身ニ横ヘ、門ノ關木七八本押折テ、内ヘツト走り入レハ、倒ル、扉ニ打倒サレ、鐵ノ楯ニ突倒サレテ、交戦之衛士五百人、地ニ臥シテ皆起アカラス、攀噲遂ニ軍門ニ入テ、其帷幕ヲ褰ケ目ヲ噴カシテ、項王ヲハハタト睨テ立ツ、髮ツラサマニアカリテ胄ノ鉢ヲ生貫キ、獅子之鬚リ毛ノ如ニ卷テ、百千萬之星トナル、目ノ毗逆サマニ裂テ、光レルコト百鍊之鏡ニ血ヲ洒クカ如也、其長九尺七寸有テ、忿レルヒケ左右ニ別レタルカ、鎧突シテ立タル體、如何ナル惡魔羅刹モ是ニハ過シト見タリケル。

〈20〉元玖本『太平記』巻第二十八「項羽高祖之事」（元玖本『太平記』勉誠社、一九七三—一九七五年）

樊會此レ已ニ喉ニ迫レルナリ。速ニ蒐入テ沛公ト同ク命ヲ失ハンニハ如シトテ、甲ノ緒ヲシメ、鉄ノ楯ヲ挾テ、軍門ノ内ヘ入ラントス。左右ニ交戦之衛士百餘人、戈ヲ支テ刀ヲ拔キ是ヲ入レシトス。樊會大ニ怒テ、其楯ヲ身ニ横ヘ關ノ木七八本押折テ、内ヘツト走り入ケレハ、倒ル、扉ニ打倒サレ、鉄ノ楯ニツキ倒サレテ、交戦ノ衛士五百餘人地ニ臥テ皆起キアカラス。樊會遂ニ軍門ニ入テ、其帷幕ヲ褰ケ目ヲ噴カシテ、項王ヲハタト睨テ立ツ。頭ノ髮上ヘ様ニアカリ胄ノ鉢ヲ生貫キ、獅子ノ怒レル毛ノ如ク卷テ百千万ノ

星ト成ル。目ノ眦逆ニ裂テ、ヒカレル事百煉ノ鏡ニ血ヲ淋  
キケルカ如ナリ。其長ケ九尺七寸有テ怒レルヒケ左右二分  
レタルカ、鎧衝ノ立タル躰、如何ナル惡鬼羅刹モ是ニハ過  
シトソ見ヘタリケル。

〔21〕神田本『太平記』卷第二十八「漢高祖與楚項羽合戰之事」  
〔太平記…神田本』国書刊行会、一九〇七年〕

樊噲此已ニ迫レル也。速ニ入テ沛公ト同ク命ヲ失ハンニハ  
シかしとて、甲ノ緒ヲシメ、鐵ノ楯ヲ挾テ、軍門ノ内ヘい  
らんトス。門ノ左右ニ交戟之衛士五百ヨ人、戈ヲ支ヘ刀ヲ  
拔テこれヲいれじトス。ハンクワイ大キニ忿ツテ、ソノた  
てヲ身ニ横ヘ門ノ闕ノ木七八本押おつて、内ヘツツ走り  
いりけれハ、たをる、扉ニ打たをされ、鐵ノたてニツキた  
をされて、交戟ノ衛士五百人地ニフイテ皆ヲキあがらす。  
ハンクワイツキニ軍門ニ入ツテ、ソノ帷幕ヲ褰テ目ヲい  
らかし、項王ヲハタト睨テたち頭ノかミさかさまニあかり  
甲ノ鉢ヲオヒ貫キ、獅子ノ怒り毛ノ如ク卷テ百千萬ノ星ト  
ナル。目ノ睨リサカサマニサケテ、ひかれる「百練ノ鏡ニ  
血ヲそ、けるか如クナリ。其長九尺七寸アツていかれる黃  
ヒゲ左右ニわかれたるか、鎧つきして立たる躰、いかなる  
惡鬼羅刹もこれニハ過じト見えたりける。

〔22〕慶長八年古活字本『太平記』卷第二十八「慧源禪菴南方  
合體事付漢楚合戰事」(旧大系)

樊噲、「此已ニ喉迫ル也。速ニ入テ沛公ト同命ヲ失ンニハ

シカジ。」トテ、胄ノ緒ヲ縮メ、鐵ノ楯ヲ挾テ、軍門ノ内  
ヘ入ントス。門ノ左右ニ交戟ノ衛士五百餘人、戈ヲ支ヘ太  
刀ヲ拔テ是ヲ入ジトス。樊噲大ニ忿テ、其楯ヲ身ニ横ヘ門  
ノ闕ノ木七八本押折テ、内ヘツツ走入レバ、倒ル、扉ニ打  
倒サレ、鐵ノ楯ニツキ倒サレテ、交戟ノ衛士五百人地ニ臥  
シテ皆起アガラズ。樊噲遂ニ軍門ニ入テ、其帷幕ヲ褰テ目  
ヲ嚙シ、項王ヲハタト睨デ立ケルニ、頭ノ髮上ニアガリテ  
胄ノ鉢ヲ、ヒ貫キ、獅子ノイカリ毛ノ如ク卷テ百千萬ノ星  
トナル。眦逆ニ裂テ、光百練ノ鏡ニ血ヲソ、ギタルガ如、  
其長九尺七寸有テ忿レル鬼鬚左右二分レタルガ、鎧突シテ  
立タル體、何ナル惡鬼羅刹モ是ニハ過じトゾ見ヘタリケル。  
〔17〕、〔18〕よりも、門を破壊する様子を詳細に描き出して  
いることが確認できる。そして、ここで改めて、注意しておき  
たいのは、和田合戦での朝比奈の軍功が、門を突破した場面に焦  
点を当てた形で語られるようになるのが、前節で確認したよう  
に、十五世紀頃になつてからであつたということである。つま  
り、樊噲の〈門破り譚〉は、朝比奈のそれよりも先行して広く  
日本で語られていたことになるわけである。しかも、門を破壊  
する場面の描写は、〔6〕〔8〕の傍線部に見られる朝比奈  
が門を破壊する場面の描写と非常によく似ている。具体的には、  
破壊される門が頑強なものとして描かれている点、そして、門  
の反対側に控えていた多くの人が、門の破壊によって、薙ぎ倒  
され、押しつぶされてしまったとされている点である。『史記』

(12)で、軍營の番兵が突き倒される描写が認められたので、『太平記』諸本(19・22)の描写は、こうしたものに依拠した可能性が考えられる。以上から、十五世紀頃に生じたと見られる朝比奈の門破りの語りの発達は、樊噲の〈門破り譚〉の影響を受けてのものであったのではないかと、稿者は考える。

### 三、朝比奈の〈地獄破り譚〉の形成

ところで、「はじめに」で紹介した通り、CBL所蔵『朝日奈物語』では、朝比奈が地獄を訪れて閻魔王を脅かす、所謂、〈地獄破り譚〉が展開されている。その中で、朝比奈は地獄にある門を剛力で破壊して、討ち入っている。これは、門破りの舞台が、地獄ではなく、飽くまでも現実世界での和田合戦での出来事とされていた(3・8)の例と、著しく性質を異にするものである。狂言『朝比奈』と奈良絵本『朝日奈』でも、冥界を脅かす話が展開されているが、朝比奈が地獄にある門を破壊することはなく、CBL所蔵『朝日奈物語』とは、位相が異なるようである。そこでここでは、この三者を対照して、その相關関係を考えてみたい。

CBL所蔵『朝日奈物語』の内容の概要については「はじめに」で、狂言『朝比奈』については、第一節で確認した通りである。成立時期については、狂言『朝比奈』は、前述の通り、寛正五年(一四六四)以前と考えられる。CBL所蔵『朝日奈物語』については、近世以降に現在の形に整えられたと見られ

るが、作品の中に、中世末期に遡る絵巻物断簡が含まれているので、この物語が成立したのは、それ以前と見るべきであろう。<sup>(15)</sup> 他方の奈良絵本『朝日奈』は、前述の通り、朝比奈にまつわる様々な伝承を集大成したような内容で、徳竹由明は『源平盛衰記』など、諸種の資料を活用して編まれたと想定している。<sup>(16)</sup> この作品の成立は、近世初期以降まで下るが、その作者が依拠した諸種の資料には、中世以前に遡るものが含まれていた可能性も、充分に考えられることだろう。そして、この作品の末尾には、朝比奈が冥界を脅かす説話が見える。その内容は、息絶えた朝比奈は冥途に向かう途中、俱生神に会い、極楽・地獄の様子を聴く。その上で朝比奈は、地獄で獄卒らを蹴殺し、地獄を破って罪人らを助けようと豪語する。驚いた俱生神は閻魔王にこの由を奏する。閻魔王は朝比奈が観音の化身であることを知り、冥官に命じて玉の御輿に乗せて天上に送った、というものである。

さて、以上の三作品の内容を対照表にまとめると、次のようになる。

〈23〉朝比奈が冥界を脅かす説話の対照表

|             |                                 |                                              |                                                         |
|-------------|---------------------------------|----------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
|             | 狂言『朝比奈』                         | 奈良絵本『朝日奈』                                    | CBL蔵『朝日奈物語』                                             |
| 冥界へ赴いた要因    | 死んだため。                          | 死んだため。                                       | 大夢で泥酔した際に見た夢で小鬼を追ったことに因る。                               |
| 話の主な舞台      | 六道の辻                            | 冥途黄泉                                         | 地獄                                                      |
| 話をした主な相手    | 閻魔王                             | 俱生神                                          | 小鬼ども                                                    |
| 地獄・極楽に関する語り | なし                              | 俱生神が地獄と極楽の様子について語る。                          | なし                                                      |
| 和田合戦との相関関係  | 閻魔王の要望に應える形で朝比奈が和田合戦の様子を語る。     | 和田合戦を描いた場面の直後に、この〈地獄破り譚〉が置かれる。               | なし                                                      |
| 冥界での闘い      | 地獄へ責め落とそうとする閻魔王に対して抵抗して動かない。    | なし。地獄に赴いたならば、阿防羅利を蹴殺し、地獄を破り、罪人等を助け出すと宣言するのみ。 | あり                                                      |
| 冥界での門破り     | なし。朝比奈が和田合戦の様子を語る中に〈門破り譚〉があるのみ。 | なし。なお、和田合戦の場面には朝比奈の〈門破り譚〉がある。                | あり                                                      |
| 冥界での宴席      | なし                              | なし                                           | あり                                                      |
| 結末          | 朝比奈は閻魔王に荷物を持たせ、浄土に案内をさせる。       | 閻魔王は朝比奈が観音の化身であることを知り、冥官に命じて玉の輿に乗せ、天上に送り届ける。 | 朝比奈は夢から醒め、地獄に落ちたら、どんなに勇力でも鬼達の餌食になるだろうと悟って、仏道に専念し、仏果を得た。 |

ここから、狂言『朝比奈』、奈良絵本『朝日奈』、CBL蔵『朝日奈物語』に見られる冥界を脅かす説話は、それぞれ様相が異なるということが確認できる。中でも狂言『朝比奈』と奈良絵本『朝日奈』は、内容的に近しい関係にある。ただし、閻魔王が直々に六道の辻に赴いている他、閻魔王に荷物を持たせて浄土への案内をさせるといった前者の設定、展開が、聖・俗を転倒させた〈笑い〉を企図した狂言の表現世界ゆえのことであると推察するならば、奈良絵本『朝日奈』に所載の説話の方がむしろ古態を留めている可能性が考えられる。CBL蔵『朝日奈物語』については、現実世界ではなく、地獄に於いて門破りをする点に、特色がある。これについては、狂言『朝比奈』に於いて、冥界で朝比奈自身が和田合戦での〈門破り譚〉を語る場面あることから展開したものであった可能性を考えるべきであろう。次に挙げるのは、『朝日奈物語』で地獄の門を破る場面だが、

〔24〕「朝日奈物語 一卷」奈良絵本国際研究会議・監修『在外奈良絵本』角川書店、一九八一年<sup>11)</sup>

巖峨々たる所に、くろがねの城門、雲を凌たり（中略）いておし倒してんと、門の扉にさうの手をおしあてて、ひし／＼とおすに、中には、すは破らるな。ふせけと、閻王の下知あるに、むねとの鬼とも、やこゑを出してさしかためけれど、あさひなは、日ころたにあるを、小鬼ともに嘲哂せられて、はら立ままに、力は剣の山をも抜つへうなりぬ

れは、た、ひた／＼とおしたふす。峨々たる巖砕落れば、  
庄にうたれ、むなきにしかれて、

傍線部では、門の反対側にいた鬼達が棟木の下敷きになっている。この点、狂言『朝比奈』(6)(7)、ならびに『太平記』諸本(19)(22)に見られる樊噲の「門破り譚」の描写と重なっている。<sup>(18)</sup>

### むすび

以上、朝比奈の「門破り譚」と「地獄破り譚」について、近世初期に至るまでの形成過程と展開を時系列に辿ってきた。十三世紀頃には既に、誤読に起因して発生したと見られる樊噲の「門破り譚」が文献に現れる。従来の研究では、あまり注目されて来なかったことだが、十五世紀頃から文献にその名の見える朝比奈の「門破り譚」よりも早い段階で、樊噲の「門破り譚」は成立していたわけである。内容的にも、門を破壊する描写や、破壊された門の向こう側の武人が薙ぎ倒される描写など、表現上の類似性は高い。樊噲と朝比奈が、それぞれ中国、日本を代表する勇猛な武人として近い認識で捉えられていたことを勘案するならば、樊噲の「門破り譚」の影響により、現在、確認できるような朝比奈の「門破り譚」が形成されていたという経緯を考えるのが蓋然的であろう。

続いて、朝比奈が冥界を脅かす説話について、狂言『朝比奈』、奈良絵本『朝日奈』、CBL所蔵『朝日奈物語』を対照してみ

ると、それぞれ様相が異なっていた。狂言『朝比奈』と奈良絵本『朝日奈』は近い関係にあるが、内容の分析から後者の方がむしろ古態を留めている可能性が考えられる。CBL所蔵『朝日奈物語』については、現実世界ではなく、地獄に於いて門破りをする点に特色がある。これは狂言『朝比奈』に於いて、冥界で朝比奈自身が和田合戦での「門破り譚」を語る場面あることから展開したものであった可能性が想定される。宮腰直人が指摘するように「地獄破り譚」は、朝比奈に限らず、坂上田村麻呂、坂田金平、源義経を主人公に据えた形でも語られ、十七世紀中葉から諸種の作品に認められるが、以上の経緯に関する検討を踏まえるならば、朝比奈のそれは、「地獄破り譚」の中でも文学史上、特に重要な位置を占めると言えようし、それを主題とした孤本、CBL所蔵『朝日奈物語』についても、また同様のことが言えるであろう。

### 注

(1) 同書を紹介した主な文献として、奈良絵本国際研究会・編『在外奈良絵本』角川書店、一九八一年。サントリー美術館・編『日本の物語絵』アイルランド・チェスター・ピーティ・コレクション一九八八年。伊藤慎吾『朝比奈物語』『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇一年国文学研究資料館、チェスター・ピーティ・ライブラリー・編『絵巻絵本解題目録 解題編』勉誠出版、二〇〇二年が挙げられる。

(2) 仮名本『曾我物語』巻第六「弁才天の御事」、幸若舞曲「和田酒盛」などに見える。

(3) 『吾妻鏡』正治二年(一二〇〇)九月二日条や奈良絵本『朝日奈』などに見える。この伝承の中近世に於ける展開については、拙稿「日本に於けるサメの認識——朝比奈義秀のサメ捕獲譚のことなど——」「軍記と語り物」第五十二号、二〇一六年三月を参照。

(4) 『本朝神社考』、『続本朝通鑑』、お伽草子『はたけ山』などに見える。

(5) 徳竹由明「東京大学国文学研究室蔵奈良絵本『朝日奈』解題・翻刻」『三田國文』三十四号、二〇〇一年九月。同「東京大学国文学研究室蔵奈良絵本『朝日奈』について」『駒場東邦研究紀要』三十号、二〇〇二年三月。伊藤慎吾「朝ひな」『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇一年を参照。

(6) 岩城賢太郎「朝比奈」という勇将…狂言(朝比奈)のシテ造型と近世期への展開」『武蔵野大学能楽資料センター紀要』二十九号、二〇一七年、参照。

(7) 本文は『群書類従』第十九輯に所載の翻刻に拠る。

(8) この他、応永二十四年(一四一七)以後成立の『桂川地蔵記』もこれに関連した例として指摘できる。応永二十三年(一四一六)、山城国桂川のとおりで石地蔵が奇瑞を示したことを受けて、多くの都人が連日のように風流を仕立てて参詣した際のさまざま出し物について、一々名称を列挙した部分で、「稚子嬰兒為風流」として、「或學樊噲入鴻門而睨項羽之勢」との文言が見え、これが「或

有舊朝稻破門之威」とともに列挙されている(引用本文は、尊経閣文庫蔵本(弘治四年(一五五八)写)に拠る)。

(9) 大いに酒を呑むという性質は、『朝日奈物語』に於ける朝日奈の人物像とも重なる。

(10) 樊噲と朝比奈の〈門破り譚〉の相関関係については、宮腰直人「地獄の門破りについて…『義経地獄破り』私注」『立教大学日本文学』九十一号、二〇〇三年十二月と、黒石陽子「草双紙と通俗軍談物の諸相」『黒本・青本の研究と用語索引』国書刊行会、一九九二年、また、松葉涼子「近世期の画像資料にみる門破り圖像の受容と展開」『立命館文学』六三〇号、二〇一三年三月に指摘があるが、いずれも朝比奈の〈門破り譚〉の形成過程に樊噲の〈門破り譚〉が影響したという可能性については考えていない。

(11) 黒石陽子、前掲論文に指摘される。

(12) 「樊噲排闥」の「闥」は、本来、宮中の小さな門のことを言う。

(13) 黒石陽子、前掲論文は、早い時期の例として『太平記』を挙げ、(17)(18)は、これを遡る。

(14) 本文は、『新編国歌大観』に所載の片仮名本に拠った。同書所載の平仮名本も、ほぼ同文。

(15) ここで、『絵巻絵本解題目録 解題編』勉誠出版、二〇〇二年に所載の解題「38 朝比奈物語絵巻 *Asina mongotari enaki* CBL1132」(執筆：黒田智)を引用しておく。【書誌】写本。卷子1軸。外題は金綾地題箋に「朝日奈物かたり」、内題なし。31.2×880 cm。表紙は白茶地に宝尽くし寿文様の金糸綾、見返しは金箔、

詞書の料紙は金泥切箔にて草花の下絵を描いた鳥の子に天地を金糸で縁取る。象牙の軸をもつ。現状では、漢字平仮名交じりの詞書6段12紙と絵5段11紙の全23紙からなる。錯簡があり、第2段の詞書(4・5紙)・絵(6・7紙)と第3段の詞書(8紙)・絵(9・10紙)が逆である。また19・20紙には中世末期に遡る別筆の絵が混入している。閻魔王が朝比奈をもてなす饗宴の様子を描いたこの場面では、中央に配された鬼が日の丸扇を持った右手をやや下げ、左手を振り上げ、同時に左脚を踏み上げる舞いの仕草であり、その周辺で閻魔王等が口を開き、あるいは扇で拍子を取りながら唄を口ずさむのも、『絵師草紙』絵師の邸での酒宴や『天狗草紙』三井寺巻の饗宴等に共通する典型的な宴の風景である。この2紙はそれぞれ横500cm、510cmで、3・4・11紙の絵と比較しても大差なく平均的な法量をもつ。けれども、他の場面と比較すると多数の縦の折れ皺や料紙の疲弊は特異で、霞による天地の縁取りや背景が無く。柔和な閻魔王の前には机が描かれず、拍子を取る鬼達は長い角もち腕部や脚部の弛れた筋肉表現も無い。朝比奈に目を転じれば、青地に笹の衣紋は消え、内着は緑色から朱色となり、白い顔料を塗り込めた肌は縮れ毛の浅黒い顔貌に変化している。因みに、2通の附属文書があり、1通は「朝比奈物語前大部分住吉具慶補足 奥一切 土佐光信筆の申伝」とあり、もう1通に「土佐光信筆 朝比奈物かたり 前数節住吉具慶補足」と記されている。中世以前制作の絵巻物断簡2紙の前後に、近世以降になって新たに絵と詞書を継ぎ足したのである。」

(16) 前掲論文、徳竹由明02、参照。以下に同論文に所載の書誌情報を引用しておく。『所蔵・東京大学国文学研究室。／函架番号・中世三五・三八一。／目録書名・『朝日奈』。／形態・奈良絵本(縦型半紙本)・綴葉装、三帖。／写年・「近世前期」写。／寸法・縦二十四・〇〇〇、横十七・六六六。／表紙・欠損(但し各帖の背の部分に、紺色地に金箔をちらした表紙の痕跡あり)。／外題・なし。／内題・なし。／料紙・斐紙。／行数・半葉十行。／墨付丁数・第一帖＝十五丁、第二帖＝十一丁、第三帖＝二十二丁。／挿絵・全十五図(第一帖＝絵1・5、第二帖＝絵6・10、第三帖＝絵11・15。なお絵5、6、7は欠損)。／奥書・無し。／印記・各帖一丁表右下に「東京大学図書館」「国文」の朱印、[196367(9)]の紫印。一、二帖の六丁表右下、第三帖十五丁表右下に「東京大学」の朱印。／備考・表紙紙見返し裏(表紙が剥落した結果、現況では表面に剥き出しになっている。)に、以下のような墨書あり。第一帖＝右上に「四」。第二帖＝右上に「三」、左端中程に「あさぬ□中」。第三帖＝右上に「五」、左端中程に「あさぬ下」。(第二・第三帖の左端中程の墨書は、『三田國文』三十四号掲載の図版から窺えるように左端が切れているが右の如く読める)。また絵9の裏(剥落しかかって裏面が窺える。)に「あさぬ 九」の墨書あり。

(17) なお、同書の解題(執筆・五来重)は、この場면을狂言『朝比奈』の門破りと比較して、『朝日奈物語』の方が古態を留めると見

(18) この他、狂言『朝比奈』(6)(7)とは、「剣の山」という

表現が登場する点でも共通している。

(19) 宮腰直人の論文としては、前掲論文の他に「悪に強ければ善にも強し」について——『朝比奈物語』覚書』『立教大学大学院日本文学論叢』三号、二〇〇三年六月。「地獄の門破りについて」『義経地獄破り』私注』『立教大学日本文学』九十一号、二〇〇三年十二月。「門破り」小考——CBL本『義経地獄破り』を端緒にして』『奈良絵本・絵巻研究』三号、二〇〇五年九月。「へ地獄破り」異聞——田村將軍の冥府譚を中心にして』『説話文学研究』四十三号、二〇〇八年七月。小峯和明・宮腰直人『義経地獄破り——チェスター・ビーター・ライブラリー所蔵』勉誠出版、二〇〇五年などが挙げられる。また、〈地獄破り譚〉については、他にも、先行研究として、麻原美子「チェスター・ビーター所蔵『義経地獄破り』をめぐる」『国文目白』二十二号、一九八三年三月。成田守「御伽草子の地獄譚」『大東文化大学日本文学研究』二十三号、一九八四年一月などが挙げられる。

【付記】本稿は、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「西欧の日本学研究者とのネットワークを通じて日本人若手研究者の国際化——絵写本・版本研究を中心として」(二〇一七年度～二〇一九年度・研究代表者・近本謙介)の成果の一部である。また、本稿は、研究発表会「チェスター・ビーター・ライブラリー蔵絵巻絵本の最新研究」(二〇一九年三月七日、於・チェスター・ビーター・ライブ

ラリー(アイルランド共和国、ダブリン)、ならびに第四二五回軍記・語り物研究会 例会(二〇二〇年十二月二十七日)での口頭発表を元に成稿したものである。それぞれ席上、ご教示くださった方々に感謝申し上げます。

(すぎやま・かずや/順天堂大学特任助教)